なお、筆者は、11月21日に行われた山畑教諭の授業、及び11月26日の中越道徳教育研究会の研究発表会の両日ともに参加し、助言を行った。

『ガールズ・オウン・ペーパー』に見る第二次世界大戦下のイギリス女性像[1]

杉　村　使　乃

はじめに

イギリスにおいては、近代における帝国拡大の背後に多くの女性たちの支持と支援があったことが今や明らかになっている。そして、文学や様々な記述は男性だけでなく、女性をも「適切な国民」として教育するために大きな役割を果たしてきた。戦争は、女性の表象に影響を及ぼし、未来の兵士を生み育て、男性の不在の中でも懸命に「家庭」を守る「母」の役割は代表的なものとして挙げられる。一方、第一次世界大戦以降のイギリスでは、それまで「男性領域」と考えられていた機械工業や軍隊の後方支援にも女性の労働力が大いに必要とされた。また女性参政権の獲得により「国民」（citizen）として行動するとはどういうことなのかが模索され、女性雑誌にもこうした動きに関連する記事やフィクションの掲載が見られる。

1880年創刊の若い女性向け雑誌、『ガールズ・オウン・ペーパー』（*Girl's Own Paper*、以下GOPと記載）は、当時の社会が女性たちに求めるもの、また女性たちのニーズを知る上で示唆的な資料と考えられる。イギリス本国が激しい攻撃を受けた第二次世界大戦では、戦場へ送られた男性たちの代わりに女性たちが、社会活動の様々な場面で活躍し、「ホームフロント」を守ることを求められた。また多くの女性たちが軍隊の後方支援にも携わった[2]。こうした社会背景がGOPに掲載された連載小説にも反映されている。ここでは、戦争の影響が特に顕著に表れた1940年～1941年に連載された小説を取り上げ、女性の戦時活動がフィクションではどのように描かれたか、また戦時下の女性たちのあるべき姿がどのように模索されたのかについて考えてみたいと思う。

Ⅰ GOPの変遷

イギリス文学・文化研究において、一次資料としてGOPを扱ったものは目新しくはないかもしれない。1880年～1884年発行分についてはすでに2006年に復刻版が出版されている。しかし、それ以後の時期における

研究について、また戦時下のメディアとしてのGOPに関する研究はまだ発展の余地があると考えられる。

最初の出版形態は週刊であったが、後に月刊となる。GOPを所蔵するほとんどの図書館はAnnualと呼ばれるクリスマス商戦向けの1年間分をまとめた版（広告を除く）を所蔵しており、ここでもこの版を使用する。簡単にこの雑誌の変遷について振り返ってみよう。

1870年の初等教育法は識字率を向上させ、多くの若年層が新しい読者として注目を浴び始めた。女性向け雑誌の創刊も相次ぎ、1880年創刊のGOPもその一つとして数えられる。1878年「宗教叢書協会」（Religious Tract Society）は少年向け雑誌、『ボーイズ・オウン・ペーパー』（*Boy's Own Paper* 以下BOP）を創刊する。これは巷に氾濫していた安価で扇情的な読み物に代わり、娯楽と教化の両方を提供することを目指していた。おもしろいことにこの雑誌は読者層としてターゲットとしていた少年たちだけではなく、その姉妹たちにも支持されるようになった。そのニーズを受け、1880年にGOPが創刊し、BOPの二倍と言われる250万部のシェアを誇るようになる。BOPが16歳くらいまでの少年たちを読者として想定した一方、GOPでは少女たちだけでなく、25歳くらいまでの未婚の若い女性を含む幅広い層に渡っていたことが読者層を拡大した理由の一つに挙げられる。以下、簡単にGOPの変遷について記す[3]。

▶1878年　「宗教叢書協会」（Religious Tract Society）*Boy's Own Paper*創刊
▶1880年　*Girl's Own Paper* 創刊　初代編集長Charles Peters（～1907年まで）
▶1907年　Flora Klickmanが編集に就く。*The Girl's Own Paper*から、*The Girl's Own Paper and Woman's Magazine*へ
▶1930年　*Girl's Own Paper*の名称へ戻る
▶1939年　Lutterworth Pressから出版
▶1947年　*Girl's Own Paper and Heiress*に名称変更
▶1951年　*Heiress*に名称変更
▶1956年　廃刊

初期のGOPはどのような女性像を読者に提示していたのだろうか。創刊から1907年まで編集長を務めたチャールズ・ピーターズは、娯楽的要素は意識しながらも、「イギリスの少女と女性たちの最も高貴な部分を育み、発達させる」という道徳性を重視した編集方針を打ち立てていた。その根幹にあったのは、キリスト教精神に基づいた「良妻賢母教育」である。ヴィクトリア朝期のこの雑誌を振りかえって、Wendy Forresterは国家の基盤としての「家庭」の担い手という女性像が初期のGOPにおいては強調されていることを指摘している[4]。

しかしながら、読者層は年齢的にも社会階層的にも多岐に渡っていたため、「家庭の担い手」としての女性が強調される一方、海外での宣教活動も含め職業選択、大学案内、スポーツ、娯楽に関する記事やフィクション（短編、連載）なども同時に提供されていた。読者層の幅広さが結果的にこの掲載記事の多様性を生んだと言えるだろう。

フィクションはこの種の雑誌の大きな呼び物であったが、BOPが冒険ものや学校ものを主なジャンルとして扱っていたのと比べると、初期におけるGOP掲載のフィクションでは、やはり恋愛、結婚、また家庭が主なテーマであった。

フローラ・クリックマンが編集長になった1907年以後は、雑誌のタイトルは*The Girl's Own Paper*から、*The Girl's Own Paper and Woman's Magazine*と変わった。10代後半から20代前半にまで渡る若い女性を主な読者層としていることを反映している。1918年、第4回選挙法改正で30歳以上の婦人に選挙権が与えられ、若い女性たちは徐々にではあるが社会における自分たちの領域を広げつつあった。こうした状況を反映して女性の仕事と賃金に関する質問が読者から多く寄せられている。また、社会で活躍している女性を取り上げるコーナーが継続的に設けられ、アメリカで医学の学位をとった女性、薬剤師の免許を取得した女性、またオックスフォードなどの大学教育に関する記事が掲載されている。職業については、ガヴァネスを始め、すでに19世紀末の段階でタイピスト、速記、ジャーナリスト、マッサージ師が取り上げられている。また、国内では難しかったが、身内以外の男性に女性が会うことができない風習が残るインドで、医療、助産婦、歯科医に携わる可能性が示唆されている。1901年には職業としての写真家も紹介されている。いずれ結婚して家庭に入るにせよ、GOPの読者の多くは少なくとも結婚までの期間を、何らかの職業について自立することが求められていたようだ[5]。

Ⅱ 第二次世界大戦とGOPに見る女性の戦時活動

総力戦となった第一次世界大戦で、イギリスは女性たちを組織的に戦時

活動に参加させ、また彼女たちの多くがむしろ自発的にこの新しい活動を受け入れた。しかし、一旦戦争が終結すると、戦場から戻ってきた男性労働者の不満が膨らむことへの懸念もあり、女性の工場労働者の多くは解雇され、また陸・海・空軍のいずれも平時においては女性の援護を必要とするべきではないと主張し、軍隊を援護する女性組織のほとんどは解散した。しかしこの戦争で女性の人的リソースは国家に強く印象付けられ、第二次世界大戦では再動員された。

GOPの紙面に明らかに第二次世界大戦の影響が見られるのは1940年10月から始まる62巻である。「できるだけ多くの読者に回覧し、その後は廃品回収箱に入れてください」という戦争による資源不足を示唆する言葉が現れ、ユニオン・ジャックを背景に、制服で戦時活動に就く女性たちの表紙がこの時期を特徴づけている。その大部分は絵であるが、1940年10月以前は、季節感を表す風景やファッション、あるいはスポーツなどの活動をする10代半ばから後半の若い女性たちが描かれていた。1940年6月中旬以後、ドイツ軍がイギリス本国に集中的に空襲（Blitz）を展開したこの時期は「バトル・オブ・ブリテン」として、また前線だけでなく、ホームフロントの多くの一般市民が激しい空襲の被害に遭いながらも戦時活動に携わったため「民衆の戦争」（People's War）として記憶されている。表紙で紹介される制服を身に着けた女性の戦時活動は、記事でも詳しい活動内容や採用について紹介されており、女性の労働力の必要性の高まりと、リクルートの意味合いが感じられる。以下、62巻の表紙の一覧である。（図参照）

1940年11月62巻 WAAF隊員

出版年月・巻	表紙:タイトル、画像	関連記事
1940年10月号、62巻	The Red Cross Nurse（絵、赤十字看護）	同タイトル記事に関連。活動の紹介
1940年11月号、62巻	WAAFの制服の女性（絵）（Women's Auxiliary Air Force　空軍補助、1939年再編）	活動を紹介する記事、フィクションに関連
1940年12月号、62巻	WRNS（絵）（Women's Royal Naval Service海軍補助、1939年再編）	活動を紹介する記事、フィクションに関連

1941年　1月号、62巻	ATS（絵）（The Auxiliary Territorial Service　主に陸軍補助、1938年再編）	活動を紹介する記事に関連
1941年　2月号、62巻	AFS（絵）（Auxiliary Fire Service 消防の補助　1938年～）	活動を紹介する記事に関連
1941年　3月号、62巻	You and Your Dog（写真）	関連記事なし
1941年　4月号、62巻	How do they live this life？（写真）（The Women's Land Army 農業補助、1939年活動再開）	活動を紹介する記事（The March of the Land Army）に関連
1941年　5月号、62巻	How to keep Animals in War Time？（写真、馬の手綱を手にする若い女性。戦時下における動物飼育）	記事(“Animal Intelligence Stories by prize-winners in recent "G.O.P." competition”.“Your First Pony”by Elizabeth Cross)に関連
1941年　6月号、62巻	Link up with the Young Farmers（写真、子豚を手にした若い女性。戦時下の畜産業、食料確保）	直接の関連記事はないが、農業補助関連の記事（"War Work in the Countryside: an Army of Herb Collectors”）あり
1941年　7月号、62巻	So you want to be a VAD（絵）（Voluntary Aid Detachment, 1909年設立、看護）	関連記事（“So You Want to Be a VAD.”）あり。赤十字と医療・看護団体のSt. John's、両者の制服を身に着けた女性たちによる応急処置と家庭における看護の紹介
1941年　8月号、62巻	Swim This Year（絵）（水泳をする若い女性）	関連記事（“Swim This Year” by Janet Bassett-Lowke）次号と連続で「戦時の水泳に関するヒント」を紹介
1941年　9月号、62巻	Voluntary Workers of Britain（絵）（WVS:Women's Voluntary Service 1938年活動開始。集団疎開[Evacuation]、空襲警戒[ARP: Air Raid Precautions]に貢献）	“Voluntary Work of Britain”

Ⅲ フィクションに見る女性の戦時活動

GOPに限らずこの頃の女性雑誌の多くが実用的な記事と共に、連載・短編小説に多くの紙面を割いていた。GOP掲載の小説のジャンルについては1930年の52巻から変化が見られる。雑誌名称からWoman's Magazineが消え、対象とする読者も結婚前の若い女性というよりは、学校に通う女子生徒向けに変化していることが伺われる。小説のジャンルは、冒険もの、ミステリー、学園もの、スポーツの4つが挙げられている。1938年以降は更に冒険もの、ミステリー、学園ものの3つに集約され、家庭の担い手という女性の役割よりも、友情やチームワークが主なテーマとなっている。

表紙や記事に戦時色が現われた62巻では、さらにフィクションの中にも、戦時活動に携わる女性たちが現れ、活動に前向きで、むしろ自分の力をそこで発揮したいと願う女性登場人物たちと成長の場としての戦時活動が描かれる。

62巻（1940年10月～1941年9月）掲載の連載小説

①“Worrals of the W.A.A.F.'s” by Capt. W.E. Johns
（空軍補助軍の制服の女性、戦時活動、スパイもの）

②“Jennifer West---Antique Dealer” by Constance M. Evans
（カントリー・ハウスを舞台にしたミステリー。読み切りのシリーズ。）

③“Such a Quiet Place” by Sybil Haddock
（カントリー・ハウスを舞台にした女性だけの所帯の家族が解決するミステリー）

④“The Ravensdale Mystery: Long Complete Spy Story” by William Earle
（カントリーに移転した学校を舞台にしたスパイもの）

⑤“The Man with the American Accent” by Maureen Frazer
（カントリー・ハウスに越してきた兄弟姉妹が解決するミステリー）

⑥“Nancy and Narpac: New Long Complete Story” by Phyllis Matthewman
（空襲下の動物を保護する戦時活動に携わる少女、ミステリー要素も含む）

⑦“A Fresh Start: Edith Miles's New four-part story”
（学校を落第した少女がジャーナリストというキャリアに目覚める。）

⑧“The Country is so Dull” by Joan Verney
（WVSの制服の女性、戦時活動、スパイもの）

フィクションの設定として使われた空襲、灯火管制の中の暮らし、スパイ活動は読者の目にリアルに映ったであろう。多くの子供たちや学校が都市部から疎開したことを反映し、ロンドン以外のカントリーを舞台としたものが多い。ゴシック小説の流れを受け、古いカントリー・ハウスを舞台にしたミステリー、冒険ものはこれまでも登場していたが、「平穏なカントリー」というイメージを覆す陰謀は、この頃の不安を象徴していると考えられる。特にドイツ軍のイギリス本国上陸が懸念されていたこの頃、イギリスの海岸沿いと、かつてそこで密輸に使われていた地下道が陰謀に使われているのは大きな特徴と言えるであろう。はっきりとナチス・ドイツのスパイ活動を描いているのは上記①、④、⑥、⑧、戦時活動に携わる女性が現われるのは①、⑥、⑧である。登場人物については、植民地帰りや外国人であることがネガティヴに表象されている。以下、これらの作品について詳しく見てゆく。

1．Worralsの冒険：「現実」を超えて

1940年10月号、62巻の表紙は空軍補助のWAAFの制服を着た女性である。この号では更にWAAFの活動や採用に関する記事も掲載されている。更にWAAFの女性を主人公とした“Worrals of the W.A.A.F.'s.”が連載を開始する。18歳のWAAF隊員、Joan Warralson（通称Worrals）は、1939年に再編された空軍の後方支援を行う女性補助部隊（Women's Auxiliary Air Force）に所属している。第一次世界大戦にも増して重要性を帯びた空の戦場とそれを取り巻く状況が描かれる。作者のWilliam Earl Johns（1893 -1968、ペンネームCapt. W. E. Johns）は自分自身もパイロットで、第一次世界大戦に参戦した。Bigglesという男性パイロットを主人公としたシリーズの作者としても知られている。Worralsは、この連載を皮切りに1950年までシリーズは続いている。

GOPには、これ以前にも飛行機を操る女性（airwoman）について記事やフィクションを取り上げてきた[(6)]。しかしそれまでの女性パイロットの物語は単独飛行を主要な冒険としていたのに比べ、ここでは戦時下という状況において、飛行機を操る腕前だけではなく、必要があれば敵の中に自ら突入し、冷静に問題を解決するという女性登場人物の新たな面が現れている。

舞台は、Surreyの人里離れた比較的小規模な航空基地（aerodrome）である。“pilot officer”という肩書きについて、Worralsは、自分には空軍に伯父がおり、彼の推薦があったこと、また単独飛行の経験があっ

たためと説明が加えられている。しかし、実際はWAAFで女性が戦闘機を操縦することは許可されていなかった。飛行機の操縦を伴う戦時活動は、工場から基地への戦闘機の輸送を行うATA（the Air Transport Auxiliary）が実際には担当している。この小説でもWorralsはTiger Mothsと呼ばれる戦闘機を修理のため工場へ運んでいることから、彼女の操縦は戦闘のためではなく、輸送のためとして設定されている。冒頭でWorralsは、既に1週間に4、5回、こうした輸送業務を3ヶ月継続しており、この業務は自転車で同じところを行き来するのと同じくらい退屈である、戦場へ赴く男性がうらやましいと不平を洩らしている。

> “The fact is …there is a limit to the number of times one can take bored. Four or five times a week for three months I’ve been doing just that, taking battered Tiger-Moths back to the makers for reconditioning. It’s about as exciting as pedalling a push-bike along an arterial road---less, in fact, because on the road there are at least hogs who try to push you off. Men can go off and fight, but girls---oh no.”（Chapter I）

Worralsにはいつも行動を共にする相棒Frecksがいる。フィクションに見られる男性二人組のbuddyを思わせる設定である。Worrals は知性を感じさせるブルネットで、可愛らしいというには余りに端正な顔立ち、そして初等学校の頃から、リーダーシップを発揮していたとある。一方、Frecksはブロンドで身なりに構わない気ままな女の子として形容され、ニックネームでもあるそばかすがチャーム・ポイントである。彼女は一つ年上のWorralsの機転、行動力、そして勇気を心から尊敬している。また、頼りになる同僚RAFのパイロットBill Ashtonがいる。彼との間には恋愛感情は全く言及されず、同僚としての男性との関係が描かれている点もおもしろい。

ある日Worralsは、基地の司令官（Commanding Officer）から呼び出され、同僚のBillから最新の戦闘機Reliantに乗せてもらい、銃の操作を教わったことについて厳しく注意される。「いざというときのために戦闘機の操縦法を学んだ方が良いのではと思い」という彼女の言い訳に対して、スコットランド、アバディーン出身の厳しい顔つきの司令官（The C.O. Squadron-Leader）McNavishは、「もし若い女性にそれが必要であるときがくるとしても、まだその時ではない」と言い放ち、二人の部下

に休暇取り消しの処分を下す。ルールを破り、同僚に迷惑をかけたことをWorralsは深く反省する。しかし皮肉なことに、予備の操縦士がいないために急遽必要になった戦闘機Reliantの運輸を司令官はWorralsに依頼する羽目に陥る。Frecksを同乗させ、Worralsは飛び立つが、その飛行は単なる輸送では済まなかった。

パイロットが帰還する夕暮れ時、前方に見知らぬ灰色の飛行機が現われる。確認のため無線のスイッチを押すと、全ての飛行機に対して、警戒とその飛行機の撃墜命令が繰り返し放送されている。Worrals は越権行為ではあるが、その飛行機の追撃を開始する。普段の自分の任務を退屈と感じていたが、このとき初めて戦時のパイロットの任務の重さを実感する。

> In her heart she hated war, but lately she had learned to hate more those who made it inevitable by wanton aggression or by forcing barbaric creeds and doctrines upon those who only sought peace. When that happened, then resistance was the only answer. At such times every member of the threatened community owed a duty to the State, and once that decision was made there could be no turning back, no flinching from the ordeals that must certainly arise, however distasteful they might be. Had she failed to do what she had just done, then not only would she have betrayed the allegiance she had sworn when she accepted the King's Commission, but she would have proved herself unworthy of her uniform and all that it stood for.（Chapter II）

制服を身に着けて空軍に勤務してはいたものの、それまでは現実の戦争に参加しているとは思いが至らなかった。心の中で、戦争に嫌悪を感じているが、いざ渦中に入ってみると、いかに耐え難い行為であれ、ひるまずに敵を撃つしかない。ひるめば、王の辞令を受けたときに誓った忠誠も、この制服が意味するものも全て無に帰すると認識する。本来ならば戦闘を前提としていない戦時活動の女性が、フィクションという形をとって、その限られた任務の境界を越境している。

見事、敵を撃墜した彼女の行為は男性たちに歓迎されることはなかったが、報酬として休暇取り消しを免除される。休暇中、Worralsは、ナチス・ドイツ軍の陰謀に出くわす。彼らの一人は牧師に成りすまし、周辺の

土地を借りて、そこへ何種類かの動物を放牧することによって、ドイツ軍の空襲を手引きしていた。次のターゲットはChurleyの大軍需工場であること、またいくつかの橋に爆弾をしかけたことなど、彼らの陰謀の証拠をつかみ、WorralsはBillに連絡を取る。WorralsとFrecksは敵に捕まり、ドイツへと連れ去られそうになるが、Worralsは敵の飛行機のハンドルを奪い、墜落させると脅し、敵の動きを封じながら無事、着陸に成功する。敵地へ乗り込み、危険な目に遭いながら、重要な機密を手に入れるWorralsの姿には、イギリス軍の諜報部（SOE: Special Operations Executive）で活躍し、映画や本で有名になった秘密情報部員Violette SzaboやOdette Churchillなどの有能な女スパイとしての様相も重ねられているかもしれない。国の重要な危機を救った二人にはもちろん昇進のチャンスが与えられたが、二人は厳しい上官の下に残ることを選ぶ。現実を超えた彼女たちの戦時活動は、むしろ男性読者の非難の目を気にせず、女性に活動の場を提供できる女性雑誌だからできたことかもしれない。

2．制服の「威力」：“The Country is so Dull” by Joan Verney

“The Country is so Dull”に登場する17歳のPip（叔母たちはPrissyと呼ぶ）も、Worralsと同様、戦時活動参加の証である制服を着用してはいるものの、思うように活動できないことに不満を感じているヒロインである。軍人の父（General Burnett）は娘に空襲下のロンドンから、Devonshireへ疎開するように命じる。

> “Very well, Daddy, but you're turning me [Pip] into a quitter, you know！ Isabel's in the Fire Service, and having a thrilling time！ And Marion said she could get me into the W.A.A.F.’s in another month. All you do is to chase me away to live with the cows！”“That is not the way to speak of your aunts [Aunt Jessie and Aunt Susan],” said her father severely.（Chapter I）

空襲下のロンドンでこそ自分の力を試したいと思っているのに、カントリーで隠遁生活を営む独身の叔母二人のもとに追いやられることにPipは不満を示す。カントリーでは必ずしも必要のない制服を着用している理由を尋ねると、叔母たちに自分は独立した女性であることを印象づけたいことが理由の一つに挙げられる。本国にやってきたアメリカ兵とその文化に影響された若者のスラングに驚く叔母たちとPipの間には明らかに世代間の隔たりが見られる。しかし戦時という緊急事態によって、女性の行動規範も変化しつつあった。それを象徴する制服を着用することによって、比較的自由に行動させてもらえることをPipは期待している。

> “I put it on to impress the aunts…When they see me in uniform they can’t make a fuss about chaperons and not going anywhere alone.”（Chapter 1）

カントリーに向かう列車の中Pipは、父の元部下（副官A.D.C. aide-de-camp）Sir Maxwell Garnerに出会う。彼はPipのWVS（Women’s Voluntary Service）の制服を見て、同じ場所（Morson）に滞在するならば、腕が不自由な自分のために運転手やその他の仕事を手伝ってくれるよう依頼する。思いがけない奉仕の機会に彼女は大喜びする。そこへ突然、列車を攻撃するナチス・ドイツ軍の戦闘機（Hun plane, Messerschmitt）が現れるが、RAFの戦闘機Spitfireがすぐに敵を追い払い、動揺は収まる。しかしながら、タイトルとは裏腹に必ずしもカントリーが平穏ではないことを予感させる始まりである。

到着するとRachinskiというポーランド人家族が海岸沿いに住み始めていた。この家族の美しい娘Wandaに、Pipの幼馴染のTonyは夢中になっていた。また無線を操る彼はナチス・ドイツの「新秩序」に共感し、これこそ若者に活力をもたらすと信じている。また彼はロンドンの空襲を実際よりも悪く触れ回り、人々の不安を掻き立てている。一方、郵便局勤めのJones夫人は、良心的兵役拒否者（Conscientious）の息子Tomが不本意な農作業に就かされていると不満を述べている。この二人の若い男性は実はポーランド人家族と協力し、放火やナチス・ドイツ軍の手引きをしていた。最終的に彼らは、言動・破壊・スパイ活動を通して敵国の後方支援を行う第五連帯活動（the fifth column）に携わっていたことにより逮捕される。平穏なカントリーに潜む危機的状況がミステリー仕立てで描写されている。

3．少女たちの団結：“The Ravensdale Mystery: Long Complete Spy Story” by William Earle

軍の諜報部に父を持つ（the British Secret Service, Major Carlan Scott）16歳の少女Joan Scottは、スーダンからの帰国子女である。メ

ガネをかけた冴えない彼女は、いつも取り巻きを連れて自分をいじめる「侯爵夫人」Dianaを始め、本国の友人たちに馴染めずにいた。空襲が始まった都市部から、海岸沿いのカントリー・ハウスへと学校は移転する。ある日、「侯爵夫人」に追われて藪に隠れていると、フランス人女性教師が海岸沿いの立ち入り禁止の崖Ravensdaleへと下りてゆくのを見かける。Joanはそこで17歳の少年、Jack Fraserに出会う。彼は三日前から行方不明の父をその谷間で探していた。協力して父を探す二人は偶然、その谷間にナチス・ドイツ軍が集まっているのを目にする。実は学校の敷地にある古井戸から、海岸までには秘密の通り道があり、フランス人女性教師はここを利用して、ドイツ軍の手引きをしていた。古くから密輸（smuggler）に使われていた秘密の地下道という設定は他の小説にも見られた。

ナチス・ドイツ軍を目にしたとき、Joanは驚愕するが、個人的な感情を超えた公の有事であることを認識する。そして自分の安全よりも、国家的な一大事である謎の解明に努める。陰謀を暴こうとしたJoanは学校でフランス人女性教師の抑え付けられ、追い出されそうになる。しかしここで意外にもDianaたちがJoanを支持し、共通の敵を目の前にした少女たちは団結する。

> Again the French mistress put her hand over Joan's mouth. Moving slowly but deliberately the Duchess [Diana] stepped forward. There was a curious gleam in her eyes.
> "Joan Scott never struck me as being mad," she said evenly. "Let her go, Mademoiselle."
> "You dare to give me orders？"
> Diana's mouth hardened. She was not intimidated. "You can't use brute force with girls in this country," she said crisply. "Let her go. If she's done anything wrong she can answer to Miss Dunmore [the headmistress]."（Chapter VII）

「我が国の少女に乱暴を働くことは許されない」ときっぱりと教師に主張する「侯爵夫人」、そして女生徒たちの団結により、ひそかに上陸していたドイツ軍についての情報は陸軍省（War Office）に通報され、解決に至る。女生徒たちの中にある「国民」としての意識を描いた小説である。

4. スクールガールにも戦時活動を！："Nancy and Narpac" by Phyllis Matthewman

前述Joanの冒険物語に見られるように、GOPでは女子生徒の中にある「国民」としての意識と行動とをフィクションを通して伝えている。この点は雑誌のプロパガンダ性を表す一方、当時の読者の間にもそうした考えが浸透していたとも考えられる。

次にあげる連載小説の主人公は14歳の少女、活発で好奇心に溢れるボーイッシュなNancy Blakeである。前述Worralsの物語にも見られたようなbuddyが彼女にもいる。親友の、「女の子らしく」、内気なBabs Meredithである。二人はやはりカントリーで暮らしており、都市部ではないため、また14歳という年齢のために戦時下において何もできないことに不満を感じている。学校で習う応急処置くらいでは満足できず、知り合いの空襲パトロール（Air-Raid Warden）に自分に何かできないか尋ねると一笑に付される。たった一つ年上の少年Jackはすでに戦時活動についているのに、そんなに男の子と女の子との間には差があるのかと不平を漏らす。

> "Well, I [Nancy] don't I think it's deadly dull. Here are we, living just outside a small country town, going to school everyday and doing just the same lessons we always did. I know we're near enough to London to hear the bombers going over at night; I know that one or two bombs have been dropped in Lynton, but we're kept outside it all…And it's all because we're not grown-up. They don't think we can do anything to help. I think it's ridiculous. Mother and Sylvia work in the canteen, Molly's in the Wrens, Jack's a messenger for the Wardens, but just because I'm a schoolgirl I can't do anything. I'm fed up！"（Chapter 1）

ある日、戦時活動のため帰宅の遅い家族を待ちながら雑誌をめくると、空襲後の動物たちの保護に携わるNARPAC（Animals' First Aid Post）の募集の文字が目に入り、訪ねてみる。応対してくれた Grant夫人は現在募集中のAnimal GuardはNancyには難しいのではないかと告げる。Nancyは激しく落胆し、やはり年齢と性別のせいで自分に機会が与えられないのだと訴える。

"That's what they all say!" cried Nancy bitterly. "It's not fair. I'm just as much use as a boy would be and they won't let me do anything." (Chapter II)

そこで Grant夫人はNancyの意欲を評価し、彼女にアシスタントとして手伝ってもらうことにする。サブ・プロットとして、とある屋敷に住む足の不自由な少年との交流、そしてナチス・ドイツ軍の陰謀と密接につながったその屋敷の謎などが描かれる。

おわりに

ここではイギリスの戦況が非常に厳しかった1940年10月から1941年9月のGOPの連載小説何点かを例に挙げ、戦時下のフィクションにおける女性像について考察した。この後、間もなくWinston Churchill首相は、1941年12月、「国家総動員法」(National Service No.2 Act)を通過させ、イギリスは組織的に女性を戦時活動へ動員していく。こうした動きに先立ち、GOPでは戦時活動に従事する制服の女性たち、また戦時活動に憧れ、活動の機会を求める少女たちの冒険と献身を魅力的に描いている。空襲という悲惨な現実がある一方、フィクションは、若い女性たちの冒険を、成功と自己実現を伴ってスリリングに描き、「女性の軍事化」を推し進める媒体となったであろう。

19世紀〜20世紀初頭の若い女性向け雑誌を分析したPenny Tinklerが述べているように、GOPは、時代の流れと若い女性のニーズをつかみ、それを誌面に反映し、読者に対して各時代の「モデル」を提示していた[(7)]。 第二次世界大戦下の戦時活動に従事した女性たちは、世間の目を引いた19世紀末の「新しい女」(New Woman)、また女性参政権獲得のために時には暴力行為も辞さなかった「サフラジェット」(Suffragette)と同様、「国家」のあり方と女性の役割という問題点を含む女性像の一つとして考えられるのではないだろうか。そこには既存の女性像への抵抗が描かれると同時に、一方では国家による「国民」としての女性の包摂も描かれる。GOP掲載の小説は女性像の変遷、戦争に対する文学的反応の一面を浮かび上がらせている。

註

(1) これは科学研究費補助金、基盤研究C 「第一次〜第二次世界大戦下、イギリスの大衆文学に見る女性の市民意識とキャリアの表象」(H20-23 代表 杉村使乃)の研究成果の一部である。

(2) 第一次、第二次世界大戦下イギリスの女性の戦時活動については拙稿「工場と戦場における女性:第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」(2006)で詳しく述べてある。またCarol Harris、Collet D. Wadge、J.B. Priestleyに体系的に女性の戦時活動がまとめてある。

(3) GOPと女性雑誌の研究については、Margaret Beetham、Mary Cadogan and Patricia Crag、Kirssten Dronter、Wendy Forrester、川端有子、Kimberley Reynoldsを参照した。

(4) Wendy Forrester pp.5-6参照。

(5) この傾向については拙稿「『ロビーナの落穂拾い』("Robina Picks up the Pieces")に見る1930年代イギリスの"girls"の表象」参照。

(6) 女性パイロット、Jean Gardner Batten他が記事として掲載されている。また、Dorothy Carterによる女性パイロットを主人公にしたフィクション、"Mistress of the Air"、"Flying Dawn"が掲載されている。

(7) Penny Tinkler 参照。

引用文献

Beetham, Margaret. *A Magazine of Her Own?: Domesticity and Desire in the Woman's Magazine, 1800-1914.* London: Routledge, 1996.

Cadogan, Mary. and Patricia Craig. *You're A Brick Angela! A New Look at Girls' Fiction from 1839 to 1975.* London: Gollancz, 1976.

Drontner, Kirsten. *English Children and Their Magazines* 1751-1945. New York: Yale UP, 1988.

Forrester, Wendy. *Great-Grandmama's Weekly: A Celebration of The Girl's Own Paper 1880-1901.* Guildford: Lutterworth Press, 1980.

Harris, Carol. *Women at War: In Uniform 1939-1945.* Phoenix Mill: Sutton, 2003.

川端有子 『復刻版 ガールズ・オウン・ペーパー:別冊解説』 京都:ユーリカ・プレス、2006.

Priestley, J. B. *British Women Go To War.* London: Collins, 1943.

Reynolds, Kimberley. *Girls Only?: Gender and Popular Children's Fiction in Britain 1880-1910.* Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1990.

杉村使乃 「工場と戦場における女性:第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」『敬和学園大学研究紀要』 第15号 2006年

———。「『ロビーナの落穂拾い』("Robina Picks up the Pieces")に見る1930年代イギリスの"girls"の表象」『新潟ジェンダー研究』 第7号 2008年

Tinkler, Penny. *Constructing Girlhood: Popular Magazines For Girls Growing Up In England, 1920-1950* (Gender & Society: Feminist Perspectives on the Past and Present) Taylor and Francis, 1995.

Wadge, D. Collett. Ed. *Women in Uniform*. London: Imperial War Museum, 2003.